2025年1月5日 新年礼拝（降誕節 第2主日礼拝）メッセージ

「歓迎されない訪問者」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 2章1－15節

日本の暦では、今はお正月の「三が日」が終わって、所謂「松の内」の期間になるのかと思いますが、キリスト教の教会の暦では、明日1月6日の「公現日（エピファニー）」までが、クリスマスの期間です。「公現日・公現祭」というのは、クリスマスから12日目に、東方から3人の博士たちがイエス様の許に来て、「キリストが公に世に現われた」ということを記念する日です。そのため、私たちも今日、聖書からそのお話の箇所を読みました。

クリスマスの降誕劇や絵本などでは、ベツレヘムの家畜小屋でマリアとヨセフによって、イエス様が生まれた後、近くの野原にいた羊飼い達がお祝いにやって来て、その後、遠い東の国からやって来た3人の博士たちが、大層豪華なお土産、献上の品を持ってやって来ます。ですから、あまり時間が経過したようには感じませんが、実際には砂漠を越えた遠い東の国からやって来て、ユダヤ地方を支配していたヘロデ王に謁見して「新しい王の誕生の場所」を尋ね、ベツレヘムのあちこちを探しまわったのでしょうから、それなりに時間がかかったのだろうと思います。このように私たちが「クリスマス物語」として記憶していることの中には、聖書に書いてあることとは異なっている部分や、書かれていないけれども、伝統的にそのように理解されていることなどが、たくさん含まれていそうです。

例えば、「3人の博士」というのもそうです。賛美歌の歌詞にもなっていますし、絵本にもそのように描かれていますが、聖書には「3人」という数字は書かれていません。あくまでも「博士たち」という複数形と、贈り物の品が3点であったということだけです。さらに古い伝承では「3人の博士／学者」が、それぞれ東の国々の「王様」であったというものもあり、豪華な贈り物と併せて降誕劇の衣装では、三人とも王冠を被っていたり、とても華やかな衣装になっていたりするのではないかと思います。ですが、もちろん聖書にはそのようなことは書いてありません。

私たちが聖書を読む時、気を付けないといけないのは、「私たちを助けてくれる神様だからこうあって欲しい」、「イエス様だからこうあるはずだ」などという勝手な願いや先入観が先に立ってしまって、聖書に書いていないことまで読み込んだ

り、時には聖書が言っていることと全く逆のことを受け取ったりしてしまうということです。この「東方の三博士／三賢人」の来訪のお話は、そもそも何を伝えているお話しだったのでしょうか。そのことついて、「黄金、乳香、没薬」という3つの贈り物をヒントに考えてみたいと思います。

まず一つ目の「黄金」です。これは取り立てて説明するまでもなく、古代から大変貴重なものでした。それこそ古代エジプトのピラミッドから発掘されたツタンカーメンの黄金のマスクなどを見ても、明らかです。そのために「黄金」は、伝統的にキリストの「王としての権威」を象徴しているものだと言われて来ました。2 つ目の「乳香」は、植物から採取される樹脂で、古代から神に捧げる香として祭儀で用いられていました。ですから、キリストが「神に捧げられること」を象徴していた。また「没薬」は、抗菌作用や鎮痛作用に優れた薬効のある樹脂で、エジプトの「ミイラ」は、防腐剤として塗られていたこの「没薬（ミルラ）」が語源なのだそうです。イエス様が十字架に架けられた時に、痛み止めとして、没薬をぶどう酒に混ぜて飲ませようとした（マルコ 15:23）と福音書にも書かれていますが、この没薬はやがて来るキリストの「受難」の象徴だと理解されて来ました。しかし、生まれて間もない赤ちゃんに対して、王権の象徴、祭儀の象徴、受難の象徴として、贈り物をするでしょうか。そのような理解・考え方をすること自体が、イエス様を「豪華な宮殿の中に生まれた王の子」、「世の大半の庶民の生活とは隔絶した王族の世継ぎ」として理解するような世界観の上に成り立っているものなのではないかと思います。

ベツレヘムの家畜小屋で、旅の途上の貧しい夫婦が初めての子を出産した。そこに同じく世間から差別されて除け者にされていた羊飼い達がお祝いに駆け付けてくれた。その次には、異国の立派な貴族の博士たちが、冠やピカピカの着物を身につけて、豪華な贈り物を届けてくれた。その後で、ヘロデ王の「嬰児抹殺命令」があったので、両親のマリアとヨセフはすぐに赤ん坊を連れてエジプトに逃れ、難民生活を送った……。というのは、何だか話がうまく噛み合っていないような、ちぐはぐなように感じてしまいます。もしもこの時、マリアとヨセフが、黄金、乳香、没薬という大変高価な贈り物をもらっていたら、彼らはどうしてずっと貧しいままだったのでしょうか。エジプトでの難民生活の間に売り払って、生活の足しにしてしまったのでしょうか。疑問が残ります。

このお話を虚心坦懐に、今までに聞かされてきたような先入観を取り除いて読んでみると、どうでしょうか。そもそも「3人の博士」自体が、異国の王でもなけれ

ば、貴族階級の博士でもなかったということからして違ってきます。「博士」もしくは「占星術の学者」として訳されている語は「マギ」というギリシャ語で、英語の「マジック」の語源となった言葉です。ですから「学者」と言うよりは、「魔術師」や「呪術師」と言った方が近いかもしれません。もちろん、科学が発達していない古代なので、科学も医学も、魔術も占星術も、全部一緒と言えば全部一緒かもしれませんが、古代イスラエルの人々の感覚としては、「星占い」も、「呪術」「まじない」も、ひどく忌み嫌われており、律法で禁じられていました（レビ 19：26、民 23：23、申 18：10～12）。

また「東」という方角も同様です。古代イスラエルの人々にとって、西は豊かな海の幸にあふれる地中海がありますが、東は不毛の砂漠です。東からは、そもそも良い物はやって来ないという理解がありました。アラビアの砂漠を越えて東からやって来たのは、素性も知れない異邦人の怪しい占い師、呪術師たちでしかありませんでした。当然、彼らはイスラエルの神様の祝福の外に置かれている人々だと理解されていました。実際、イエス様の所にたどり着いた彼らは、異国の宮殿付きの貴族、知識階級としての博士として、大勢のお供を引き連れてやって来たわけではなく、無名の占い師として、着の身着のまま命懸けで砂漠を旅して来たごく僅か数人だったでしょう。そして彼らが差し出した贈り物も、大きな宝の箱に入っていたわけではなく、移動や運搬にかさ張らない程度の小さなものに過ぎなかったのではないかと想像します。もちろん、没薬や乳香はもともとが希少な樹脂ですし、それこそ「黄金」も、いわゆる「金の延べ棒」のような大きな物ではなく、装飾品として身につけていた指輪や首飾り、耳飾り程度のものだったのではないでしょうか。ここで大事なのは、歴史的事実として、誰によって何がどれだけ捧げられたか、ということではなくて、イエス様の許を訪れた人たちがそれぞれに自分の持っている良いものを献げた、羊飼いたちのように持っていない人は自分に出来る良いことを献げたということなのだろうと思います。

そもそも、ここで黄金や乳香、没薬がイエス様に献げられているのは、ヘブライ語聖書の中のイザヤ書に「終末の時、救われたシオン（エルサレム）に、異邦人たちが、黄金と乳香を主に献げる」（60：6）と預言されていたためです。福音書を記したマタイが、イエス様によってそのイザヤ書の救いの預言が成就したと理解したからこそ、そのように記されたのだろうと考えられます。さらに言えば、福音書にはミカ書（5：1）の預言の成就として、「イエス様はベツレヘムに生まれた」と記され

ていますが、歴史的事実としては今日の聖書学では、皇帝の勅令による人口調査もありませんでしたし、イエス様はナザレに生まれ、エジプトに逃れることも無かっただろうと考えられています。

イエス様は「神の子として、神の身分でありながら、へりくだってベツレヘムの飼い葉桶の中にお生まれになったが、その後はずっと神の人として清く尊く生きられた」として、私たちがこのクリスマス物語を理解する時、イエス・キリストはどこにおられるでしょうか。尊い神の人は、神殿の奥、清らかな聖域にましまして、庶民は遠くから遥拝するのみ。そしてその恵みや祝福を、いわば「おこぼれ」のような形で頂くだけ、になってしまわないでしょうか。聖書に記されている一連のクリスマス物語から、私たちが受け取るメッセージは、そうではありません。世間から「歓迎されない訪問者」として、イエス様の両親はベツレヘムにやって来て、イエス様自身も居場所すら与えられずに生まれて来ました。そしてそこには世間から除け者にされていた羊飼い達がやって来ただけではなく、忌み嫌われていた異教の怪しい呪術師たちがやって来ました。皆、「歓迎されない訪問者」たちでした。

神様は「歓迎されない訪問者」として、私たちの前に現れます。そしてそれは神様の価値観、イエス様の目がどこの誰に注がれているかを、私たちに示してくれます。また私たち自身が、たとえ他人から歓迎されない時であっても、神様がいつも隣に共にいて下さることを示してくれます。クリスマスに人間としてお生まれになった「インマヌエル（私たちと共におられる神）」は、神殿の奥に鎮座ましまし、高価な献げ物のみを喜ばれ、そのお返しとして祝福を与えて下さるような方ではありません。

昨年のお正月に、石川県能登半島で大きな地震が起こり、その後も豪雨の災害も続きました。あれから一年が経ちましたが、まだまだ復旧作業が手付かずの所も多くあるようです。またロシアとウクライナの戦争、イスラエルとガザ、シリアとの戦争も終わりが見えない状況が続けられています。私たちの暮らしているこの世界には、目を向けたくないこと、歓迎したくない現実がたくさんあります。それらに目を背けて、自分にとって心地よいこと、見たいものだけを見ている時、神様はどこにいるのでしょうか。「歓迎されない訪問者」として私たちが目を背け、追い返してしまっている人たちの中に、神様はおられるのかもしれません。今年一年も、神様の目と心がどこに注がれているか、私たちは神様の御心を尋ね求めながら、日々、命の神と共にあって、生かされて参ります。